

司教叙階 25 年 神の選びとわたしの召命

パウロ大塚喜直

教皇聖ヨハネ・パウロ二世による任命

わたしの司教任命書の日付は、1997 年 3 月 3 日でした。この任命を知ったのは、3 月初旬当時のバチカン大使カルー大司教様に呼ばれ、司教任命を受諾するように言われた時でした。当惑しているわたしに、大使は司教任命に至るプロセスを延々と 30 分あまり英語で説明されました。頭の中はパニック状態でしたが、重要な説明を聞きのがしてはならないと英語に集中しました。説明が終わると、大使は任命を受けますかとお尋ねになりました。躊躇していると、それではもう一回説明してあげましょうと、先ほどの説明を最初から始められました。2 回目の説明の間、この説明が終われば同じことを訊かれると予測できたので、断る理由を頭の中で考えました。

2 回目の説明が終わりました。受けますかと問われ、42 歳であったわたしは、アイ、アム、ツーヤング（わたしは若すぎます）と答えるのがやっとでした。それはデータで分かっています、断る理由になりませんと諭されました。ではもう一回説明しましょうと、なんと 3 回目の説明が始まりました。大使はよどみなく、それまで同じ説明を繰り返えされました。わたしはこのパターンが永遠の続くような不安に襲われ、いよいよ返事をしなければならないと覚悟しました。

3 回目の説明も終盤に差し掛かったとき、それまでになかった説明が始まりました。それはこうでした。教皇様は司教任命を行なわれる時、必ず御父に祈ってから決められるのです。これを聞いたわたしの脳裏には、教皇様が跪まずいて祈っておられる光景が浮かびました。そして、この司教任命は神の選びなのだと悟りました。

神の選びと召命

わたしはこども頃に司祭になりたいと思いました。そして司祭職への道を志し、司祭叙階の恵みをいただきました。しかし、司教任命は突然身に降りかかりました。旧約時代の預言者たちの召命のようです。エレミヤも、わたしは若いという言い訳は通用しませんでした。司祭叙階の時、主に生涯仕える決心をしたわたしは、大使から教皇が祈って決められると聞いて、司教任命を断れば司祭叙階の約束を自分で破ることになると思い至り、お受けしますと答えました。2 時間ほど経っていました。この場面は今でも鮮明に覚えています。そして、新たな司教任命の発表があるたびに、この時の自分を思い出し、それぞれの神父様たちが皆同じように司教任命を受諾されたのだらうと、神の選びの不思議に思いを馳せています。こうしてわたしは、神の呼びかけには 2 種類あると思うようになりました。神は司祭になりたいという望みを人に与える一方で、突然人に任務を与えることもあるのだと。

主がこれを感じる人

マルコ福音書の十二使徒選定の場面（3・13-16）は、新共同訳聖書では、イエスは山に登って、これと思う人々を呼び寄せられたとあります。フランシスコ会訳聖書では、自分の望む人たちをとあります。これらの訳を見ると、多くの弟子たちが比べられて、見所があると見込まれた人が使徒として選ばれたと解釈してしまいますが、聖書原典を調べると、その人にとってよかれと思い、その人を望まれた、というニュアンスのようです。選ばれた人たちの資質が問われたわけではないのです。

司教任命が公表されたあと、ある方から、あなたはイエスさまから愛されていますねと言われ、当時は正直その言葉を素直に受けとめることができませんでした。司教職を続けるうちに頷けるようになりました。主が人を呼ばれるのは、その人に資質があるからではなく、その人を愛されているからであり、どんな選びであっても、神の選びは無償の愛からのものなのだと。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」（ヨハネ 15・16）。わたしは司祭としてイエスによって選ばれたがゆえに、自分の好きなことをするのではなく、イエスに倣い、御父が命じられ、御父が語られたことを行なえば、実を結ばせることができ、しかも、その実が残るようにして下さるのだと確信しています。

司教職二十五年の感謝

わたしの司教任命がバチカンで公示されたのは 1997 年 4 月 1 日ローマ時間 12 時でした。エイプリルフールの日です。日本では 19 時に一斉ファックスが配信されましたが、デマが飛び交っていると教区本部事務局に電話がありました。わたしこそ、デマであってほしいと思いました。司教叙階式は 6 月 15 日洛星高校の講堂をお借りして行われました。それから 25 年がたちました。司祭になって幸せですかとよく訊かれますが、だれも司教になって幸せですかと尋ねる方はおられません。きっと、司教という聖務の重さを押し量っておられるからでしょう。

今、京都の司教として第一に感謝することは、京都教区で働いてくださる司祭団に恵まれた、支えていただいたことです。司教叙階当時の先輩神父様たちは、若輩の司教を支え、教区運営を順調に進めていかなければならないという責任感からでしょうか、本当に未熟なわたしをよく支え、励ましてくださいました。

司教は司祭人事を行います。わたしの司教任命の体験から、それぞれの司祭に職務を与えるだけでなく、その人の人生の時間をそれに捧げていただくのだと荘重に考え、主の祈りつつ決定しています。

主は欠点と弱さを抱えたあるがままのわたしを、主の道具となるように呼ばれていますが、まだまだ主の無条件の愛を受けとめきれしていません。どうぞ、京都教区の司教として主のしもべであるわたしのために、これからも皆様のお祈りをお願い致します。